

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追及、特集号
第二百二号

原告団レポート

遺族——
松永 九重さん

ここに、昭和三十八年十一月九日の三川鉦炭じん大爆発による犠牲者の遺族の一人、松永九重(このえ)さん(大正十四年九月二十四日生れ、五十六歳)一家が住まっています。

結婚のこと

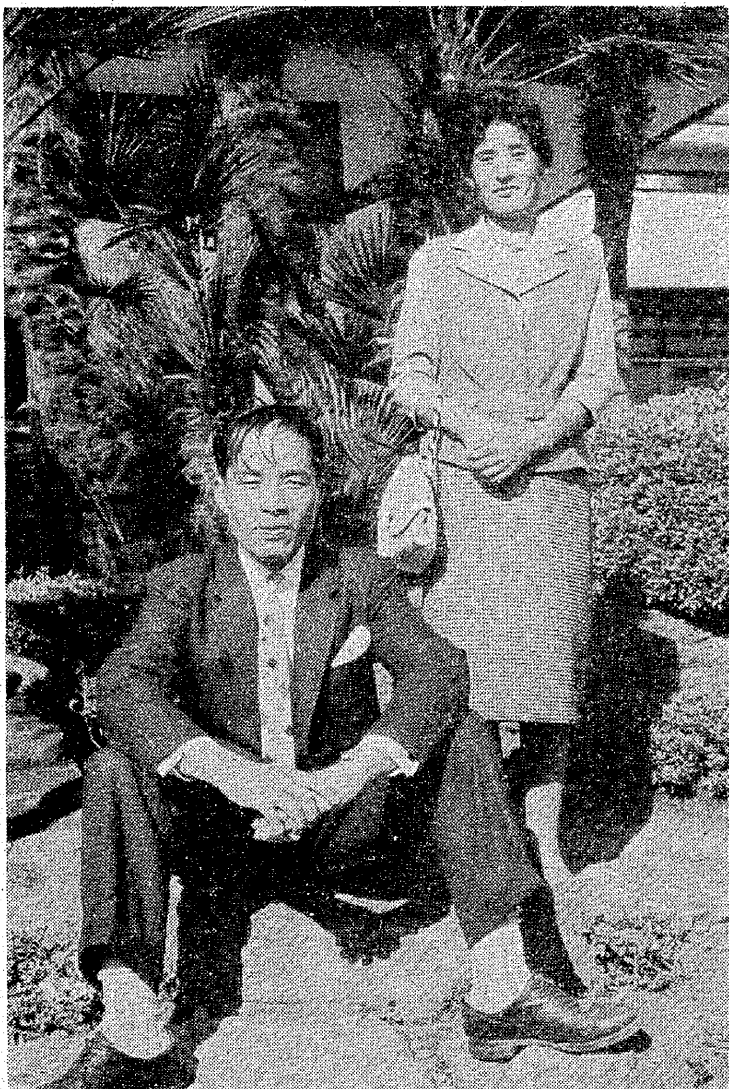
炭じん爆発の犠牲となった故松永芳明さんは、昭和十五年十月三日生れ、爆発の時三十七歳だった。炭じん爆発の前、新港(大牟田市新港町)から移り住んだのは、およそ一年半ばかり前の十一月十六日のことだった。手狭な新港のこともあり、長男の栄治さんが思いついて建てたものだが、多少交通の便が悪いというところがあるが、なせ比較的に安い価格で新築できたというのが魅力だった。

炭じん爆発の前、新港(大牟田市新港町)から移り住んだのは、およそ一年半ばかり前の十一月十六日のことだった。手狭な新港のこともあり、長男の栄治さんが思いついて建てたものだが、多少交通の便が悪いというところがあるが、なせ比較的に安い価格で新築できたというのが魅力だった。

聖が丘団地

聖が丘団地、といってもまだあまり知られていない新興団地。正しくは荒尾市一部二八二の二七二という。入口にアーチの大きな門のある団地で、およそ五十戸ばかりの新しい建物が並んでいる。

閑静というよりも、静かすぎるのではないかとと思われるくらいで、近くには買物をするところもなく、静かな住宅のこともあり、長男の栄治さんが思いついて建てたものだが、多少交通の便が悪いというところがあるが、なせ比較的に安い価格で新築できたというのが魅力だった。



三川鉦炭大災害の前年、職場の夫婦同伴旅行で。二人で写ったのは、はじめてで最後となった。

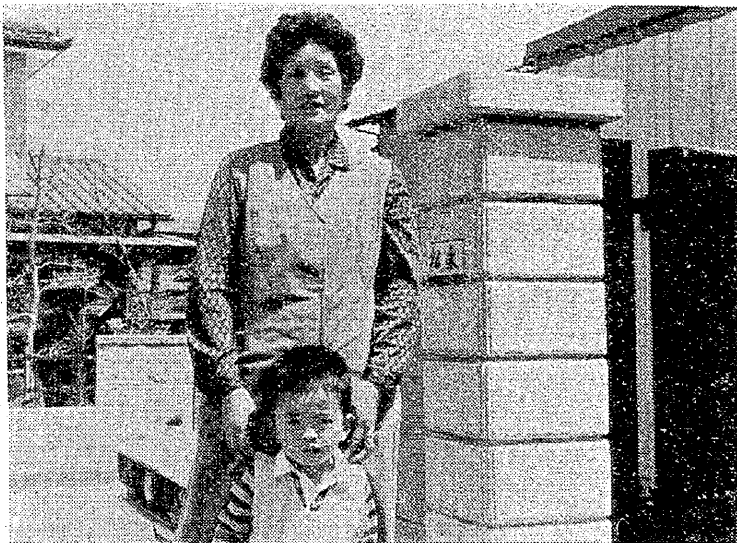
この苦勞、口ではいえぬ

夫は方替りの応援作業で犠牲になった

会社は生きているあいだ面倒を見よ

重傷を負う

その年のメーデーの日に、九重さんは姉の家にきていたが、メーデーの景品の配給をもらいに売店で並んでいると、三人ほど前に芳明さんがいる。見合はしてないが顔は知っている。「結婚もして、子供が生まれるし、父親もいよいよと」と九重さん親もいるということで、無理に仕事も休んで、三川鉦炭じん大爆発の前、新港(大牟田市新港町)から移り住んだのは、およそ一年半ばかり前の十一月十六日のことだった。手狭な新港のこともあり、長男の栄治さんが思いついて建てたものだが、多少交通の便が悪いというところがあるが、なせ比較的に安い価格で新築できたというのが魅力だった。



聖が丘団地の自宅前で、九重さんと正芳くん。

応援作業で

その日、芳明さんはきびしい合理化のなかで、乙方(二番方)へ一週間の応援にまわされていた。そして土曜日の夜、来週からは甲方に戻るはずだった。「私の体の具合が悪かったのだ、今日は休まんね」といったんです。そして「お前は寝ておきな」といって、自分で買物に行き、私に好物のポテト餅を買ってきてくれ、ご飯を炊き、弁当を詰めて出て行ったんです。

退職したが

九重さんは十六年勤めた誘致工場を五十五年九月に定年退職した。体が弱く、手術を含めて四回も入院しながらの労働だった。「今は孫の守りで大変ですが、夫が生きていれば定年になってのんびりしている頃ですね」

進学を断念

二人のあいだには、長男栄治さん(二十四年生れ)、二男繁さん(二十六年生れ)、長女真弓さん(二十八年生れ)、と三人の子供がいる。

繁さんは、二市市の呉服屋に勤め、真弓さんは福岡済生会病院の看護婦さんである。いまこうして子供たちも独立して生活しているが、それぞれに苦しい思いがある。

栄治さんは右京中学を卒業後大阪に出て、商店勤めから自動車整備に転じた。大牟田市内にあったが、繁さんが当時「学校で皆んなにいわれる」といって、学校に行きたがらない。九重さんが「脱落せずに、正しいことをしているんだから」と励ました。結果は、体も

子に済まぬ

福岡の春日原で火葬を終えて帰ったのが十一日の真夜中、もう疲れきっていた九重さん。「骨になった夫の前で、私も体がこんなに弱い。死にたいと本当に思いました」「けれど子供も小さいし、死にきれん」と自分を励ました。

「早く裁判を進めたいし、いかに結果が悪くても、会社は生きている間面倒を見るのが当然」と語る九重さんである。

「前号訂正」前号の頁で、野田幹郎さんとすべきところを、雄と誤りました。おわびして訂正いたします。